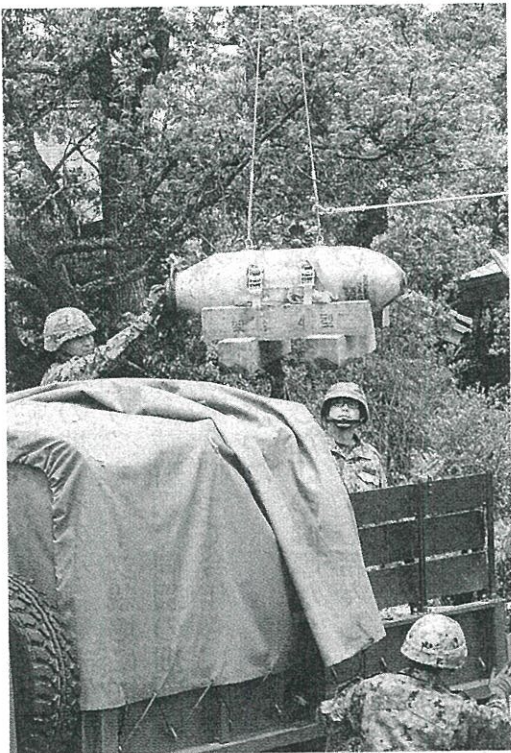


不発弾 終戦直前投下か

信管を取り除いた後、クレーンで自衛隊の車両に移される不発弾。8月5日、熊本市東区



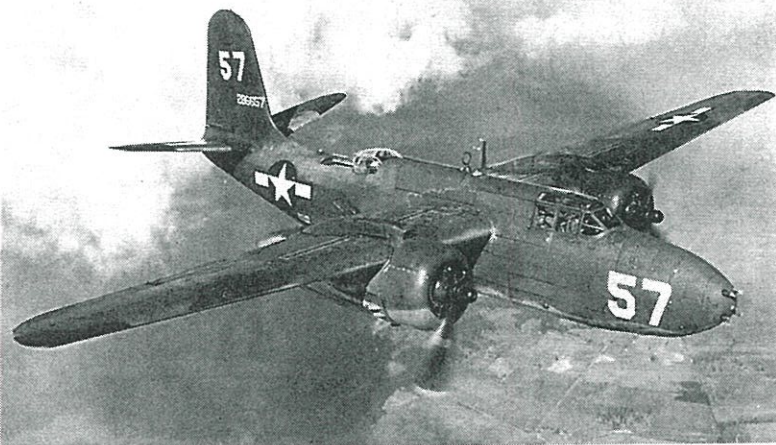
熊本市東区 工事現場で7月発見

市民団体調査 「米軍 低空で工場爆撃」

熊本市東区画図町下無田の下水道工事現場で7月に見つかった不発弾について、市民団体「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」(高谷和生代表)などは7日、米軍の軽爆撃機が終戦直前の1945年8月10日に投下した可能性が高いとする調査結果を発表した。

陸上自衛隊が8月に信管を取り除き、表示から米軍の「M76焼夷弾」と特定。同ネットワークと「空襲戦災を記録する会全国連絡会議」(山口県周南市)は「県内での投下が確認されていない」として、市提供の写真や陸自の証言、米軍資料などを調べた。

その結果、不発弾は弾底部付近に「尾翅」と呼ばれる羽が付いた通常型



米軍の軽爆撃機「A-20」(空襲戦災を記録する会全国連絡会議の工藤洋三事務局長提供)

ではなく、落下傘で投下する焼夷弾だったことや、制圧した沖繩に基地を設けた極東航空軍第5航空軍に所属する軽爆撃機A-20か「A-26」

が投下したことが推定されたとしている。

落下傘を使うと、低空飛行で正確に爆撃することが可能という。同ネットワークなどは当時、熊本周辺に集積していた航空機の下請け工場をピンポイントで破壊するため、米軍が複数の軽爆撃機による低空での空襲を試みたとみている。

高谷代表は「不発弾は歴史資料として価値が高かった。戦争の悲惨さを伝えるためにも、真相を知ることが重要だ」と話している。

(九重陽平)